

2023年4月13日

ロシアの対ウクライナ「特別軍事作戦」開戦経緯の再検討

研究助手
河西 陽平

問題意識

2022年2月24日ロシアがウクライナに対して「特別軍事作戦」と称する軍事侵攻を開始してから一年以上が経過した。ロシアが軍事侵攻に踏み切るか否か、軍事や外交、安全保障の専門家の間では見解の相違が見られたが、一度開戦した場合にはウクライナ軍は短時日のうちに屈伏されるとの見方が多数派であった。

ところが実際に両国間に戦端が開かれると、大方の予想を覆してウクライナ軍は善戦し、一度はロシア軍に占領された南東部の要衝の奪還に成功した。現在、東部ハリコフ州のほぼ全域が奪還されており、南部ヘルソン州の解放も着々と進行している。

ウクライナのオレクシー・レズニコフ国防相は10月26日「占領されているすべての領土を解放するための現実的な計画がある」と発言し¹、あらゆる占領地からのロシア軍戦力の放逐に向けて自信のほどを披歴している。ただし同人は、今年2月初めに首都キエフに対してロシア軍が再び攻撃を行う可能性について指摘しており²、今後の戦況については必ずしも楽観視しているわけではない。

一方ロシアは、開戦当初の目的を達成できないばかりか予想以上の死傷者を出している。戦力不足を補うためにプーチン大統領が9月21日、第二次世界大戦以後初めてとなる部分動員令を発した³のは記憶に新しい。その後ロシアは、ウクライナ東部のドネツク、ルガンスクおよび南部のヘルソン、ザポリージャ各州で「住民投票」を実施、9月27日にこれら四州をロシア領に併合することに成功したが、これを容認できないウクライナ軍の攻撃を受け、四州の確保が危ぶまれている。このように、両国の戦争は持久戦の様相を呈している。今後の戦況について予測することが困難であることは言うまでもない。

今回のロシア・ウクライナ戦争をめぐっては様々な論点が存在するが、そのなかでも戦争に至る道程において、ロシアの指導部内でどのような議論が交わされたか、開戦準備はいつ頃、誰がどのようにして行ったのか、戦争計画の青写真はいかなるものであったかについてはこれまで不明瞭な点が少なくなかった。

しかるに開戦から一年以上が経過したことによって、ロシアの開戦経緯をめぐる公開情報の量は増大し、その実相に迫ることが一定程度可能となった。本稿では、公開情報に基づいて「特別軍事作戦」の開戦経緯を可能な限り明らかにしつつ、以下の論点について検討を加える。すなわち、①いつ、誰が侵攻を決定したのか、②いかなる作戦計画であったのか、③作戦の蹉跌は何故

起きたのか、④今後の見立て、の四点である。

1. いつ、誰が侵攻を決定したのか

ロシアでは「特別軍事作戦」と呼称されるウクライナへの武力行使は、プーチン大統領を含む、ごく少数の指導的立場にある人々の間で決定されたと言われてきた。

昨年11月3日の英国「タイムズ」紙の報道によると、プーチンに対してウクライナへの軍事侵攻を進言したのはニコライ・パトルシェフ安全保障会議書記、アレクサンドル・ボルトニコフ連邦保安庁（FSB）長官、セルゲイ・ショイグ国防相であり、とりわけ侵攻に積極的であったのがパトルシェフとボルトニコフであったという⁴。この二人は、ウクライナに対する武力行使が、増大しつつある西側諸国からの脅威からロシアを救うことになるとの提案を行い、「特別軍事作戦」を実施するというプーチンの最終的な判断に影響を与えたと考えられている⁵。

この「タイムズ」紙の論説からすると、プーチンがパトルシェフ、ボルトニコフの両者に強く説得されて開戦を決定したように読めるが、実情はやや異なるものであったと推察される。

プーチン、パトルシェフ、そしてボルトニコフの経歴に注目すると、これら三者は全員旧ソ連国家保安委員会（KGB）の出身であり、KGB レニングラード支局時代には同僚の関係にあった。これに加えて、国内保安及び防諜を取り扱う KGB 第2総局をはじめとする中核機構を引き継ぐかたちで成立した FSB では全員が長官職を経験しているという共通点がある。

パトルシェフは1975年のKGB入局以降プーチンと親交を深め、現在までに続く友情を育んだとされている。ソ連崩壊後、ロシア保安省のカレリア支局長を務め、1994年にはロシア連邦防諜庁（FSK）の自己保安局長、1998年には大統領府監督総局長・副長官を歴任した。当時FSB長官であったプーチンが首相代行に任命された1999年8月パトルシェフは横滑りのかたちでFSB長官代行に就任、2008年5月まで長官職の座にあり、ボルトニコフが後任となってからは安全保障会議書記として、クレムリン内で大きな存在感を発揮している。

このように治安機関出身という共通性のある三人ではあるが、特にプーチンとパトルシェフの結びつきの強さはつとに知られており、クレムリン界隈の人物による犯罪行為の調査・追及を行っている「ドシエセンター」のジャーナリストであるセルゲイ・カーネフは、この二人は単なる友人同士の関係ではなく「同志」であると考えている（Патрушев и Путин – не просто друзья. Они единомышленники.）⁶。

ここでカーネフは「同志」を意味するロシア語として、единомышленники という言葉を用いている。一般的に「同志」あるいは「同輩」の意味として用いられるのは товарищ であるが、единомышленники には「同志」「仲間」といったほかに「同意見の人」あるいは「共謀者」といった意味合いがある。

このことが意味するのは、プーチンとパトルシェフは、西側諸国の価値観はロシアにとって安全保障上の脅威となるという認識、西側諸国に対する不信感、ウクライナをロシアにとっての緩衝地帯と捉える安全保障認識、旧ソ連構成国としてのウクライナに対する特別な感情といった考え方を共有する関係にあるということである。

したがって「タイムズ」紙に書かれているように、パトルシェフとボルトニコフがプーチンにウクライナへの武力侵攻を強硬に主張し、最終的に侵攻の決定に踏み切らせたのではなく、プー

チン自身がそもそもウクライナをめぐる問題を軍事的手段によって解決することに積極的だったのであり、二人の進言はプーチンが決定を下すにあたって「最後の押し」であったのではないかと考えられる。そういった意味では、パトルシェフやボルトニコフの進言以上に、長年ウクライナに対してプーチン自身が抱いている観念やイデオロギー的思考の方が、開戦の決定により重要な役割を果たしていたのではないかと考えられる。

それでは、実際にウクライナとの間に戦端が開かれた場合、戦闘を指揮することになるロシア軍の指導部は、開戦決定にどのような関与をしたのか。

ショイグ国防相の姿勢については不明瞭な点がある。「タイムズ」紙では、ショイグはパトルシェフやボルトニコフほどウクライナ侵攻に積極的ではなく、開戦するか否かで揺れ動いていたと記されている⁷。

一方別の報道では、ショイグはプーチンに対して、ウクライナにおける軍事作戦は平時編成の軍隊のみで遂行することが可能であり、総動員をかけることなく、契約兵だけの力でごく短期間に作戦を遂行できると約束したといわれている⁸。

ショイグの姿勢を理解するのが困難なのは、いずれの報道も開戦前のどの時期（傍点筆者）に彼が動揺を見せていたのか、あるいはウクライナを軍事的に屈伏させることは容易であるとプーチンに進言していたのかを明らかにしていないためである。

各種報道の内容がいずれも事実であると仮定すれば、二つの可能性が考えられる。

第一の可能性は、ショイグは国防相としてロシア軍の実力を高く評価しており、ウクライナの打倒はごく短期間に完了すると信じていたが、開戦決定が下される直前になって、何らかの原因でそれまでの自信が揺らぎ始めたというものである。

確かにショイグは国防相として2014年、ロシア軍側にほとんど被害を出さずにクリミア半島を迅速に占領しており、この時の成功体験をウクライナで再現できると考えたのかもしれない。

しかしプーチンによって開戦の決定が下される直前、ロシア軍の情報筋、たとえば参謀本部情報総局（GRU）やウクライナを含む在外のロシア大使館に勤務する駐在武官のルートからもたらされた情報に、ウクライナ軍がクリミア併合当時に比べて格段に増強されていること、ウクライナとの戦争は長期化する可能性があることなど、「都合の悪い」情報をもたらされたとすれば、それらがショイグを動揺させたのかもしれない。

第二の可能性は、ショイグは当初ウクライナにおける軍事作戦がクリミアを併合した時のように短期間に、しかも損害をほとんど出さずに完遂できるとは考えていなかったが、GRUや在外公館に勤務する駐在武官経由でもたらされたのが「都合の良い」情報であり、これがショイグの情勢認識を楽観的にしたというものである。

開戦に先立って、GRUや在外公館の駐在武官がウクライナ情勢に関していかなる情報を収集、分析していたのか、その結果どのようなインテリジェンスがショイグにもたらされたのかという点については、資料的困難により現時点では明らかにすることはできない。

しかしながら、ショイグが事前に軍関係者のルートから受け取ったインテリジェンスがどのようなものであったとしても、彼にはプーチンとパトルシェフ、そしてボルトニコフのラインで取り決められていた開戦決定に異議を唱えることはできなかったものと考えられる。

また、後述するようにウクライナ情勢に関する情報収集・分析において主導的な立場にあったのはGRUではなくFSBの第5局であり、開戦後の作戦行動に関する計画も、この部局の行った

情勢判断を基礎に立案されたものと考えられる。一部の報道によると開戦前 GRU はウクライナ情勢に関するプーチンの理解に敢えて異議を唱えることはなかったという⁹。

開戦後、当初想定していた程短期間で終わらなかったのはウクライナ国内の情勢、ウクライナ軍の抗戦力などについて誤った情報をプーチンに伝えたからだとして、セルゲイ・ベセダ FSB 第5局長とアナトリー・ボリュフ局長代理が解任され、その後 FSB 第5局の職員約150名が更迭されるという事態が生じ¹⁰、5月に入ってようやく GRU の総局長第一代理を務めるウラジーミル・アレクセエフ将軍がウクライナ国内の情報収集・分析活動の責任者に任命された¹¹ことをみても、開戦前における FSB 第5局による情勢判断の影響力は大きかったといえよう。

それでは、プーチンが最終的に開戦を決断したのは具体的にいつ頃のことなのか。

上記「タイムズ」紙によると、2021年の「夏の終わりまでに」開戦の決定がなされ、セルゲイ・ラブロフ外相には戦争を回避するために西側諸国から大幅な妥協を引き出すという任務が与えられており、ラブロフ自身は平和的な解決を望み、プーチンもそれを望んでいると確信していたという¹²。ラブロフの確信の根拠は不明であり、開戦を決定した場にラブロフが同席していたかどうかとも判然としない。

考えられるのは、開戦の決定はプーチン、パトルシェフ、ボルトニコフおよびショイグで内々に行われたが、ラブロフを含む他の安全保障会議常任議員たちには、ウクライナ問題の解決手段としてはあくまで外交が主で、戦争が従であるかのように伝えられていたという可能性である。

プーチンが外交による平和的な解決を希求していたことを示す証拠は現在までのところ確認されず、開戦を既定路線とするという認識を共有していたのは上記の四名（およびヴァレリー・ゲラシモフ参謀総長）であり、他の面々には戦争準備と外交を並行して行うように説明がなされていたかもしれない。

事実、ロシアのエリート指導者層の大部分、安全保障会議常任議員のメンバーでさえも、2022年2月21日ドネツク・ルガンスク両人民共和国の国家承認に先立って開催された安全保障会議まで、開戦の決定について知らされていなかったようであり、ドミトリー・ペスコフ大統領報道官は、ラブロフを含む安全保障会議常任議員の大部分が会議の直後に、キエフに対して攻撃が行われると知らされたと証言している¹³。

プーチンやパトルシェフが「夏の終わりまで」になされた開戦決定以降ウクライナ問題を外交的手段によって解決するつもりがなかったことを傍証するものとして、次の二例が挙げられる。

2021年10月21日、イスラエルのナフタリ・ベネット首相（当時）がソチでプーチンと会談した際、ゼレンスキー大統領がプーチンと個人的に会うことに関心を抱いていることを伝えたところ、プーチンは「この人物と議論することは何もない。このユダヤ人は何者なのだ。彼はナチズムを支持している」と、ベネットの提案に全く関心を示そうとはしなかったという¹⁴。

また2021年11月2日、米国のバイデン大統領の要請を受けてウィリアム・バーンズ中央情報局（CIA）長官率いる代表団がモスクワを訪問、ウクライナへの全面攻撃は悲観的な結果をもたらすということをロシア側に警告した。

この会談に参加したジョン・サリヴァン駐露米国大使によると、パトルシェフはロシア軍が米軍に匹敵するほど近代化されていると述べ、バーンズに対して「我々はそれ（ウクライナへの全面攻撃）が可能である。我々は戻ってきた」と自信のほどを披歴したという¹⁵。

なお、開戦の決定が下された「夏の終わりまで」という時期にも依然として曖昧さが残る。昨

年11月30日に発表された英国王立防衛安全保障研究所（RUSI）のロシア・ウクライナ戦争に関する報告書によると、2021年の7月にFSB第5局の第9課（作戦情報課）は、ウクライナ占領計画の具体的なプランを立案するよう指示されていたという¹⁶。

プーチンが、ロシア人とウクライナ人は民族的に一つであることを示した論文「ロシア人とウクライナ人の歴史的一体性について」を大統領府のホームページに発表したのが7月21日¹⁷であり、時期的に近接していることは確かである。

一方で、開戦後に対ロシア協力者としてウクライナ保安庁に逮捕された最高会議議員の証言によれば、2021年6月末にGRUの職員たちが「侵略に向けた何らかの準備計画の開始に関する難解な話」をしているのを耳にしたという¹⁸。実際に開戦が決定される以前から、水面下で着々と侵略に向けた下準備が行われていたことを傍証する証言といえよう。

これまでの議論をまとめると、ウクライナに対する「特別軍事作戦」の実行はプーチンとごく一部の側近によって決められたわけだが、プーチンはパトルシェフやボルトニコフに突きあげられたのではなく、長年にわたってウクライナに対して抱いている領土的野心やイデオロギイ的思考を彼と共有するKGB時代からの仲間との合議に基づいて開戦を決断したのだと考えられる。

2. いかなる作戦計画であったのか

ロシアのウクライナに対する「特別軍事作戦」が開始されてから約一か月後の3月25日、ロシア国防省において開戦後初めての記者会見が行われた。報道陣を前にしてセルゲイ・ルツコイ参謀本部作戦総局長は、参謀本部には当初、①作戦区域をドネツク・ルガンスク両州の行政境界線内に限定する、②ウクライナ全土において作戦を展開するという二つの案が存在しており、後者が承認されたと発表している¹⁹。

興味深いのは、少なくとも参謀本部においては軍事作戦の範囲をあくまでウクライナ東部二州に限定するという案が検討されていた点である。最終的に第二案が採用された理由についてルツコイは、東部二州に作戦区域を限定した場合、「キエフ政権」からの恒常的な補給を受けた軍隊と戦わなければならないからだと説明している²⁰。

すなわち、東部二州を除くウクライナ領土を軍事的に制圧することにより、軍事物資や兵隊の供給能力を奪った上で東部二州の「解放」に専念する方がより適切との判断であるが、ドネツク・ルガンスク両州を「解放」するために、これら両州を合わせたより遥かに広大なウクライナの他の地域を、開戦当初投入された15万という兵力で制圧するというのは、軍事的な視点から判断して合理性を欠いている²¹。

上記RUSIの報告書によると、侵攻計画の最終案はFSB、ショイグ国防相、ゲラシモフ参謀総長と大統領府の共同作業によって作成されたという²²。おそらく最終案を練り上げる段階で作戦範囲を東部二州に限定するか、ウクライナ全土に展開するかをめぐって協議が行われ、後述するようにFSB第5局のもたらした楽観的な情勢分析に依拠した結果、第二案の採用に至ったものと考えられる。

最終案ではロシア軍部隊とFSBに対して次のような任務が与えられた。

すなわち、①侵攻の時期、方向および規模についてウクライナ政府に誤った認識を与える、②ウクライナ軍の抵抗を無力化するため、敵の空軍および海軍力、対空防衛力を殲滅する、③ウク

ライナ軍の地上兵力をドンバス地方での軍事作戦に拘束し、殲滅する、④政治指導者たちと軍司令部を排除することによって、ウクライナの抵抗の意思を抑圧する、の四点である²³。主戦場がドネツク・ルガンスクの東部二州であり、迅速に敵の抵抗力を奪うことによって短期間で作戦を完了する電撃戦の発想である。

紙幅の都合上、戦闘の詳細は割愛するが、ここでは特にウクライナの政治指導者と軍司令部を排除するためにいかなる準備がなされたのかを明らかにしたい。2月24日国境を超えたロシア軍部隊の一部がウクライナの首都キエフに向かって進撃を開始したのは周知の事実だが、公開情報によって明らかになったところによれば、ロシア側は大規模な攻撃を加えることによってではなく、キエフの政府機能を奪取した後に傀儡政権を樹立することによって、ウクライナの抵抗意思を削ぐつもりであった。そしてこの計画を実行するにあたって重要な責任を担っていたのが、FSB第5局とGRUであった。

開戦に先立ってFSB第5局はモスクワに対し、ゼレンスキー政権を内部から掌握すること、電撃戦によってウクライナに軍事侵攻することが不可欠であるとの報告を行っている。彼らはまた、ゼレンスキー政権は政治的に不安定であること、国内では政権に抵抗する気運が高まっていること、ウクライナ国民の大部分は、モスクワによって擁立された新政権を受け入れるか、あるいはそれに忍従する準備ができているとの情勢分析を行った²⁴。

FSB第5局は、2014年ヤヌコーヴィチ政権の崩壊を導いた「マイダン革命」が勃発した際、ウクライナから脱出した親露派政党の「地域党」および「野党プラットフォーム・生活党」の議員から成る傀儡政権をウクライナに樹立しようと企んでいたのである²⁵。

ウクライナの情報機関によれば、開戦後ベラルーシの首都ミンスクに向かっていたヤヌコーヴィチ元大統領率いるグループと、ロシア軍によって占領されているウクライナ南東部に「地域党」にかつて在籍していた親露派議員から構成されるグループの姿がそれぞれ確認されていたという²⁶。

傀儡政権への入閣を予定されていたのは、パーヴェル・レベデフ前国防相、アレクサンドル・ヤキメンコ前保安庁長官、ヴィタリー・ザハルチェンコ前内務省長官、ヴラジーミル・シフコーヴィチ前国家安全保障・国防会議副書記、アンドレイ・クリュエフ前国家安全保障・国防会議書記・前大統領府長官であり、ヤヌコーヴィチ政権で要職の地位にあった人々である²⁷。

クリュエフとシフコーヴィチは、「マイダン革命」によって国外に脱出した後、FSBの庇護の下にモスクワに設けられた事務所に勤務していたことが判明している。両名はFSBに対して、ウクライナ国民のうちどのような人々を対露情報協力者として獲得すれば良いのか、どのような人々を占領後のウクライナ国内で利用すれば良いのかという点について提案しており、ウクライナにおけるFSB第5局の政治工作活動のアドバイザー的役割を果たしていたといえよう。

シフコーヴィチに関しては、2013年キエフの独立広場で行われた学生達による抗議デモを解散させようとした人物であり、ロシアの情報機関にウクライナの国家機密を受け渡していたことが理由で、昨年7月23日ウクライナ国家調査局によって国家反逆罪の疑いをかけられている²⁸。

開戦後、対露協力の疑いで800名以上のウクライナ人が逮捕されているが、特に注目されたのがウクライナ保安庁クリミア支局長という要職にあるオレーグ・クリニッチが拘束されたことである。

クリニッチはシフコーヴィチを通じてFSB第5局と協力関係を結んでおり、2020年10月の支

局長就任以来、対露協力者をウクライナ保安庁の様々な要職につけており、防諜機関の業務をサポートさせたほか、ウクライナの機密情報を長期にわたってロシア側に提供していたことが明らかとなった²⁹。

開戦当日、午前4時にロシア軍がクリミアから攻撃を開始し、その後ウクライナ全土へ進撃するという情報が防諜機関から伝えられていたにも関わらず、クリニッチはこれを握りつぶしたとされている。

ウクライナ保安庁のクリミア支局は2014年以来ヘルソン州に設置されていたが、この支局は対露情報協力の拠点となっていた可能性が高い。事実、ロシア軍による全面攻撃が開始された後、ヘルソン州にいるウクライナの軍・治安機関関係者はロシア軍が進入してくるのを待っていたとの情報が存在する³⁰。

クリニッチの素性については、既に2021年4月の時点で、過去にFSBアカデミーで学び、ロシア連邦防諜庁(FSK)で軍務についていた経歴が明らかになっている。これを受けて、当時「国民の僕」党のマクシム・ブジャンスキー議員はウクライナ調査局と国家安全保障・国防会議に対して、クリニッチのクリミア支局長解任を要求した。もっとも、1990年代にロシアの情報機関に学び、勤務したという経歴それ自体はロシアとの協力関係が現在まで続いていることを証明するものではなかったため、一部に疑惑は残ったものの、結局クリニッチが職を解かれることはなかった³¹。

ウクライナ保安庁は元々ソ連時代のKGBのウクライナ支局が前身となっているため、ソ連時代あるいはロシア連邦成立初期に同国の情報機関に勤務した職員の全てを疑うことは、保安庁全体にメスを入れることである。こうしたことが容易でないことを承知しているFSB第5局は、長い期間をかけてウクライナの情報機関内部に浸透していったものと推察される。

開戦に先立ってウクライナ国内の情勢分析や、同国内に多数の対露協力者を獲得するという政治工作を担当していたのがFSB第5局であったとすれば、GRUはキエフの政府機能を短時間で掌握する実働部隊としての役割を与えられていたと考えられる。

この任務を遂行するにあたってGRUもウクライナ国内の協力者を利用しており、最大の協力者の一人が「労働ウクライナ党」議長のアンドレイ・デルカッチであった。上述したシフコーヴィチやクリニッチ同様、デルカッチも親ロシア派として知られており、2020年11月の米国大統領選挙の民主党候補であった、バイデン前副大統領と息子ハンター・バイデンをめぐる疑惑に関与したと見られる人物である³²。

デルカッチはGRUから提供された多額の工作資金によってウクライナ国内に多数の警備会社を設立したが、これらの警備会社には、開戦後ロシア軍が敵の障害を受けることなくウクライナの市街地に入ることを援助する役割を与えられていたという。

デルカッチとGRUの連絡役をしていたイーゴリ・コレスニコフ最高会議議員がウクライナ保安庁の尋問に対して供述したところによれば、GRUはウクライナ侵攻に際して、特殊部隊「タンボフ」「ウリヤノフスク」の二個旅団をベラルーシ方面から投入する計画を有していたとされる³³。

GRUの計画によれば、開戦後特殊部隊は迅速にキエフに接近、プレスチャーティク通りを占領、政府庁舎を封鎖した後に議会でウクライナ新政府の成立が宣言される予定であった。また、市街がロシアに降伏したことが明らかになったら、デルカッチが事前に設立しておいた警備会社の職員たちがロシア国旗を掲げ、装甲車輛で市街に入場する予定であったともいわれている³⁴。

その後の調査で明らかになったところによると、デルカッチとコレスニコフが GRU との間に協力関係を結んだのは 2016 年のことであり、モスクワを訪れた際、ウラジーミル・アレクセーエフ GRU 総局長代理と最初に顔合わせをし、その後イーゴリ・コステュコフ GRU 総局長に会い、対露情報協力者となったという³⁵。

開戦に先立って、FSB 第 5 局と GRU の役割はおおよそこのように分担されていたのではあるが、この分業体制は事前に両者が綿密な調整を行った末になされたものなのか、あるいは互いが事前に協議を十分に行わないまま、別々に準備を進めていった結果なのかは現在に至るも判然としない。いずれにせよ、彼らの計画が開戦直後に頓挫したことだけは明らかである。

ロシア側が以上のような電撃戦をどのようなタイムスケジュールに沿って行おうとしたかについては、ウクライナのオレクシー・ダニーロフ国家安全保障・防衛会議書記が興味深い発言をしている。ダニーロフが入手した情報によれば、ロシア側は第一段階として、3 月 7 日までにキエフを含むドニエプル河左岸のウクライナ領土を占領し、しかる後にリヴォフまでのウクライナ全領土を開戦後 19 日までに掌握する計画であったといわれる³⁶。

明らかなことは、開戦に関わったロシアの指導者たちはウクライナとの長期戦など全く想定しておらず、二つの情報機関による政治工作によってゼレンスキー政権を容易に転覆させることが可能であると考えていたことであり、開戦劈頭ウクライナ領土へ殺到したロシア軍に与えられた役割はあくまで二義的なものであったということである。

3. 作戦の蹉跌は何故起きたのか

「特別軍事作戦」を開始するに際してロシア側が当初想定していた電撃戦は何故失敗したのか、また開戦後現在までロシア側が抱える問題点について、インテリジェンスと組織構造上の問題から指摘しておきたい。

何よりも重要なのは、開戦前のウクライナの情勢認識に関する問題である。

この点については、既に様々な報道あるいは研究者の間で、FSB 第 5 局の失態が指摘されている。すなわち、ひとたびロシアが武力行使に踏み切れば、ウクライナを軍事的・政治的に打倒することなど造作もないことであり、ウクライナ国民はロシアを歓迎するであろうというインテリジェンスを開戦前にプーチンに伝えたが、実際にはそのような事態が起きなかったことからプーチンの怒りを買ったというものである。

しかしながら、実際には開戦前、FSB 第 5 局にはウクライナの国内情勢に関する確度の高い情報が通知されていた。

FSB に近い関係にある Research & Branding 社が 2022 年 1 月末にウクライナで行った世論調査によると、「ウクライナ領内にロシア軍が出現することは何を意味するか」という質問に対して、「占領」と回答したのが 84%、「解放」と答えたのは 2.4%に過ぎなかった³⁷。すなわち、FSB 第 5 局は正確な情報を入手しながら、あえてプーチンに伝えようとしなかったということになる。

おそらく FSB 第 5 局としては、2021 年の「夏の終わり」までにプーチン、パトルシェフ、ボルトニコフのラインによって開戦が決定されていたため、開戦直前になって都合の悪い情報を報告するのをためらったのではないかと考えられる。

FSB 第 5 局はプーチンが FSB 長官の職にあった 1998 年、彼の肝いりで新設された部署である

が、その任務はいわゆるインテリジェンスではなく、旧ソ連構成諸国のモスクワからの離反を防ぐために政治工作を行うことであった。グルジア（当時）およびウクライナで「カラー革命」が起きた2004年、FSB第5局には第9課（作戦情報課）が設置され、この課がウクライナにおける政治工作を担当することになった。

しかるにこの部署の職員は、多額の資金提供と引き換えに対露協力者を獲得することには注力したものの、彼ら自身がウクライナの国情について分析業務に取り組むことはなかったようである。すなわち、彼らは獲得したウクライナ国内の対露協力者によって提供される情報を無批判に受け入れていたのであった。

FSB第5局の職務上の無能ぶりに関しては同じFSB職員からも批判されており、ウクライナの主要な閣僚の名前も分からず、2013年までにウクライナのほぼ全土がヤヌコーヴィチ大統領に対して憎悪の目を向けていたという現実にも注意を払っていなかったというのである³⁸。

その結果、FSB第5局は2014年の「マイダン革命」の際、ウクライナ国民によるデモを鎮静化し、ヤヌコーヴィチ大統領にとって都合の良い政治状況を生み出すという任務に失敗、プーチン大統領の怒りを買って大量の人員整理が行われたのだが、セルゲイ・ベセダ局長はプーチンの温情か、あるいは別の理由で現職に留任していた。

ベセダ率いるFSB第5局のウクライナ情勢の分析はかくも杜撰なもので、2014年以降も職務の改善が行われた様子は見られない。このような怠惰な勤務を続けた結果、開戦直前の2022年1月末の時点で、ロシア軍の進入を「解放」と考えるウクライナ国民が全体の2%弱に過ぎないという衝撃的な事実に接したFSB第5局は、混乱のあまり、プーチンにこの情報を伝達することを差し控えたのではないだろうか。

もちろん情勢分析の杜撰さという点でいえば、FSB第5局だけでなくGRUやプーチンも同様であろう。既に述べた通り、GRUもロシア軍のインテリジェンスコミュニティとして十分な機能を果たしていたとは言い難い。事実、開戦前にコステュコフ総局長が注力していたのは軍事情報の収集・分析ではなく、ウクライナ国内における謀略活動であった。

もしGRUの側で「ウクライナ軍は増強されており簡単に屈伏させることは不可能である」あるいは「ウクライナ国民はロシアによる武力介入を歓迎していない」という情報が入手されていたとしても、ウクライナにおける情報収集・分析においてFSB第5局が主導的立場にあったこと、同局がプーチンの肝いりで設立されて強い影響下にあること、FSBと比較してGRUの所帯と影響力が小さいことなどを考慮すると、そのような情報が事前にプーチンに伝えられたかどうかは疑問である。すなわち、開戦に先立って、プーチンに対して都合の悪い情報を伝えるものがおらず、また伝えられる環境も存在していなかったのである。

プーチンに関して言えば、開戦決定にあたってウクライナの国内事情や軍隊の増強ぶりなどについて慎重に分析した形跡がなければ、FSB第5局やGRUに対して詳細な分析を命じた形跡も見られない。おそらくプーチン自身が、パトルシェフやボルトニコフと同様、ウクライナ全土を容易に占領することが可能だと最初から考えており、その確信が全くの誤りであったことを認めることができず、自分の強い影響下にあるFSB第5局に責任を転嫁したというのが実情だと考えられる。

こうした「インテリジェンスの機能不全」によってもたらされたウクライナに関する誤った情勢認識は、軍事作戦の計画そのものにも影響を及ぼしている。

たとえば、開戦直前の2月23日に第26戦車連隊所属のある部隊が受領した命令書には、作戦開始後ドニエプル河を渡って一日に400キロを走破せよとあり、この任務を遂行するにあたって部隊の戦力・戦備を増強する必要はないと記されている³⁹。またベラルーシに駐屯していた別のロシア軍部隊の内部文書によると、同部隊の第一陣がキエフに到着するのは、2月24日14時55分までとされていた⁴⁰。

ウクライナ軍による抵抗をほとんど考慮しておらず、開戦から2~3日程度でキエフの政府機能を掌握して新政権を樹立、これをもって作戦完了とする、プーチン、パトルシェフ、ボルトニコフのラインで決定された計画にあたかも擦り合わせるかのような命令書である。

しかしながら、事前の誤った情勢認識は開戦後あらゆる面に渡って齟齬をきたしている。大規模な軍事行動よりも政治工作によって内側からゼレンスキー政権を瓦解させることが「特別軍事作戦」の要であったため、その失敗が明らかになってからのロシア軍の対応は後手に回っている。これに加えて、当初想定していなかったウクライナ軍の抗戦力、西側諸国による同国への豊富な軍事支援によって両者の戦闘は今後長きにわたって消耗戦の様相を呈することになると考えられる。

4. 今後の見立て

ロシア・ウクライナ両国が互いに妥協を見せない現状では、ロシアはウクライナ全土の占領、ウクライナは1991年の独立時に認められた国境の回復という目的を達成するまで戦闘を停止するつもりはないであろう。長期戦を遂行するためには条件があり、ウクライナの場合は戦争目的を完全に達成するまで西側諸国からの持続的な軍事支援が必要不可欠である。

もっとも、ウクライナに対する持続的な支援にも限界はあろうと思われる。ロシア側による戦争のエスカレーションの危険性を横目に見ながらの支援をせざるを得ないであろうが、ウクライナのために支援を行った結果、自国の安全保障に支障が出るような事態も同時に避けなければならない。西側諸国としては、そのような事態が現実味を帯びる前に、できればウクライナに有利なかたちで戦争が終結してほしいというのが本音ではないだろうか。

一方ロシアに関して、開戦後西側諸国によって相次いで行われた経済制裁は、同国に対して深刻な影響を与えているとは言い難い。そもそもプーチンと一部の側近によって始められた今般の「特別軍事作戦」は経済的合理性よりは自国の安全保障、領土的野心によるもの⁴¹との指摘にもあるように、経済的手段によって停止させることの現実的な可能性は乏しいといえよう。むしろ、経済制裁、西側諸国からの批判が強まれば強まるほど、ロシア国民はプーチンの下に結束する可能性がある。

現在のプーチン政権は、長期戦に備えてロシアを段階的に戦時体制に切り替えようとしているふしがある。12月21日ショイグ国防相は国防省の拡大会議でロシア軍の増強を提案、契約軍人および義務年限服従中の軍人、動員兵を合わせて150万人に増やすこと、特に契約軍人については現在の29万人から69.5万に拡大する予定であると発表した⁴²。

また初等教育機関だけでなく高等教育機関においても「特別軍事作戦」の正当化を目的としたイデオロギー教育が開始される予定であり、「歴史」「文化」「世界におけるロシア」「将来の姿」といったコース別に、若い世代を対象とした愛国教育が実施されることになるという⁴³。

加えて気がかりなのは、パトルシェフ安全保障会議書記の最近の発言である。

彼は現下の戦争に関して「ロシアはウクライナと戦っているのではない」「現在の衝突はウクライナ人の手でロシアに対抗しようとしている西側の試みである」と述べており、現在ウクライナで展開されているのはロシアと NATO、英米両国との対立であると強調している⁴⁴。パトルシェフのこれら一連の発言は、交戦相手をウクライナではなく強大な西側諸国と規定することによって、更に多くのロシア国民を戦争に動員する布石となるかもしれない。ロシアの側による戦争の更なるエスカレーションの恐れと可能性については、引き続き注視する必要がある。

¹ 「ウクライナ国防相「全領土の解放に現実的な計画」」NHK ニュース（オンライン）2022年10月26日。
<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20221026/k10013870431000.html>（2022年12月20日閲覧）

² Isobel Koshiw and Peter Beaumont, “Putin preparing major offensive in new year, Ukraine defence minister warns,” *The Guardian*, December 15, 2022. <https://www.theguardian.com/world/2022/dec/15/ukraine-says-putin-is-preparing-major-offensive-in-new-year>（2022年12月20日閲覧）

³ 部分動員令に関する大統領令。ロシア連邦大統領府の公式サイトより。2022年9月21日。
<http://kremlin.ru/events/president/news/69391>（2022年12月20日閲覧）

⁴ Owen Matthews, “Inside Putin’s bunker: how he kept the plan to invade Ukraine secret,” *The Times*, November 3 2022. <https://www.thetimes.co.uk/article/how-putin-kept-the-plan-to-invade-ukraine-a-secret-nlw087729>（2022年12月28日閲覧）

⁵ 同上。

⁶ 同上。

⁷ 同上。

⁸ «Кто управляет российскими войсками в Украине,» *Важные Истории*, 23 Августа 2022.
<https://istories.media/opinions/2022/08/23/kto-upravlyayet-rossiiskimi-voiskami/>（2022年12月28日閲覧）

⁹ 同上。

¹⁰ FSB 第5局の粛清に関する詳細については、以下を参照。河西陽平「「特別軍事作戦」初期におけるロシアの対ウクライナ・インテリジェンス」NPI コメンタリー（2022年7月）
<https://npi.or.jp/research/2022/07/21183039.html>

¹¹ Андрей Солдатов, Ирина Бороган, «ГРУ выходит на первый план,» *agentura.ru*, 9 мая 2022.
<https://agentura.ru/investigations/gru-vyehodit-na-pervyj-plan-nbsp/>（2022年12月30日閲覧）

¹² Owen Matthews, “Inside Putin’s bunker: how he kept the plan to invade Ukraine secret,” *The Times*, November 3 2022. <https://www.thetimes.co.uk/article/how-putin-kept-the-plan-to-invade-ukraine-a-secret-nlw087729>（2022年12月28日閲覧）

¹³ 同上。

¹⁴ «Перед войной Патрушев сказал США: «Мы вернулись». Уже в марте Путин признал, что все «куда труднее, чем мы думали,» *Meduza*, 19 декабря 2022.
<https://meduza.io/slides/pered-voynoy-patrushev-skazal-ssha-my-vernulis-uzhe-v-marte-putin-priznal-cto-vse-kuda-trudnee-chem-my-dumali>（2022年12月31日閲覧）

¹⁵ 同上。

¹⁶ Mykhaylo Zabrodskyi, Jack Watling, Oleksandr V Danylyuk and Nick Reynolds, “Preliminary Lessons in Conventional Warfighting from Russia’s Invasion of Ukraine: February–July 2022,” 30 November 2022.
<https://static.rusi.org/359-SR-Ukraine-Preliminary-Lessons-Feb-July-2022-web-final.pdf>（2022年12月31日閲覧）

¹⁷ プーチン論文『ロシア人とウクライナ人の歴史的一体性』、ロシア連邦大統領府公式サイトより。2022年7月21日。
<http://kremlin.ru/events/president/news/66181>（2022年12月31日閲覧）

¹⁸ Юрий Смирнов, «ГРУ выделяло десятки миллионов долларов Деркачу на захват Украины: детали разоблачения,» *Liga.net*, 24 Июня 2022.
<https://www.liga.net/politics/articles/gru-vydelyalo-desyatki-millionov-dollarov-derkachu-na-zahvat-ukrainy-detali-razoblacheniya>（2022年12月31日閲覧）

¹⁹ «ВС РФ рассматривали два варианта спецоперации: в границах ДНР и ЛНР или на всей Украине,» *TASS*, 25 Марта 2022. <https://tass.ru/armiya-i-opk/14186363>（2023年1月1日閲覧）

²⁰ 同上。

²¹ 「ロシア、ウクライナ国境沿いの部隊ほぼ全て投入＝米国防総省高官」ロイター通信（日本語版）2022年3月8日。

<https://jp.reuters.com/article/ukraine-crisis-usa-military-russia-idJPKBN2L42CG>（2023年1月1日閲覧）

- ²² Mykhaylo Zabrotskyi, Jack Watling, Oleksandr V Danylyuk and Nick Reynolds, "Preliminary Lessons in Conventional Warfighting from Russia's Invasion of Ukraine: February–July 2022," 30 November 2022. <https://static.rusi.org/359-SR-Ukraine-Preliminary-Lessons-Feb-July-2022-web-final.pdf> (2023年1月2日閲覧)
- ²³ 同上。
- ²⁴ Валерия Кондратова, «"ФСБ и ГРУ конкурировали в Украине". Как провал спецслужб стоил России 40 000 жизней,» Liga.net, 25 Июля 2022. <https://www.liga.net/politics/articles/fsb-i-gru-konkurirovali-v-ukraine-kak-proval-spetsslujb-stoil-rossii-40-000-jizney> (2023年1月3日閲覧)
- ²⁵ 同上。
- ²⁶ «ФСБ рассчитывала, что Россия быстро захватит Киев, — и подготовила для Путина сразу два варианта марионеточного правительства,» Meduza, 20 августа 2022. <https://meduza.io/feature/2022/08/19/fsb-rasschityvala-chto-rossiya-bystro-zahvatit-kiev-i-podgotovila-dlya-putina-srazu-dva-varianta-marionetchnogo-pravitelstva> (2023年1月3日閲覧)
- ²⁷ Валерия Кондратова, «"ФСБ и ГРУ конкурировали в Украине". Как провал спецслужб стоил России 40 000 жизней,» Liga.net, 25 Июля 2022. <https://www.liga.net/politics/articles/fsb-i-gru-konkurirovali-v-ukraine-kak-proval-spetsslujb-stoil-rossii-40-000-jizney> (2023年1月3日閲覧)
- ²⁸ «Госбюро расследований на Украине предъявило обвинения бывшему замглавы СНБО Сивковичу,» ТАСС, 23 июля 2022. <https://tass.ru/mezhdunarodnaya-panorama/15293221> (2023年1月3日閲覧)
- ²⁹ Александр Литвин, «Крупнейший из агентов РФ в Украине: как советник главы СБУ отправлял письма в РФ, собирал иконы и готовил "русский мир",» OBOZREVATEL, 27 Октября 2022. <https://news.obozrevatel.com/economics/economy/krupnejshij-iz-agentov-rf-v-ukraine-kak-sovetnik-glavyi-sbu-otpravlyal-pisma-v-rf-sobiral-ikony-i-gotovil-russkij-mir.htm> (2023年1月3日閲覧)
- ³⁰ 同上。
- ³¹ 同上。
- ³² 「米、選挙介入疑惑でウクライナのデルカッチ議員ら4人に制裁」ロイター通信 (日本語版) 2020年9月11日。 <https://jp.reuters.com/article/usa-election-interference-sanctions-idJPKBN2613EO> (2023年1月5日閲覧)
- ³³ Юрий Смирнов, «ГРУ выделяло десятки миллионов долларов Деркачу на захват Украины: детали разоблачения,» Liga.net, 24 Июня 2022. <https://www.liga.net/politics/articles/gru-vydelyalo-desyatki-millionov-dollarov-derkachu-na-zahvat-ukrainy-detali-razoblacheniya> (2023年1月5日閲覧)
- ³⁴ 同上。
- ³⁵ 同上。
- ³⁶ Оксана Житнюк, «Янукович 7 марта сидел в Минске, потому что это был дедлайн РФ по захвату Киева – Данилов,» Liga.net, 4 Января 2023. <https://news.liga.net/politics/news/yanukovich-7-marta-sidel-v-minske-potomu-chto-eto-byl-dedlayn-rf-po-zahvatu-kieva-danilov> (2023年1月6日閲覧)
- ³⁷ «Как ФСБ провалила задачу по подготовке вторжения в Украину,» The Moscow Times, 19 Августа 2022. <https://www.moscowtimes.news/2022/08/19/kak-fsb-provalila-zadachu-po-podgotovke-vtorzheniya-v-ukrainu-a23390> (2023年1月6日閲覧)
- ³⁸ Роман Анин, «Как Путин принял решение о войне,» Важные Истории, 16 Мая 2022. <https://istories.media/opinions/2022/05/16/kak-putin-prinyal-reshenie-o-voine/> (2023年1月10日閲覧)
- ³⁹ «Перед войной Патрушев сказал США: «Мы вернулись». Уже в марте Путин признал, что все «куда труднее, чем мы думали,» Meduza, 19 декабря 2022. <https://meduza.io/slides/pered-voynou-patrushev-skazal-ssha-my-vernulis-uzhe-v-marte-putin-priznal-chto-vse-kuda-trudnee-chem-my-dumali> (2023年1月10日閲覧)
- ⁴⁰ 同上。
- ⁴¹ 鈴木一人「ロシアへの経済制裁は一体どの程度効いているか」アジア・パシフィック・イニシアティブ「地経学ブリーフィング」No.122 2022年9月19日。 <https://apinitiative.org/2022/09/19/40157/> (2023年1月10日閲覧)
- ⁴² «Посреди войны против Украины в России объявлена масштабная реформа армии. Зачем это Путину и Шойгу?,» Meduza, 22 декабря 2022. <https://meduza.io/feature/2022/12/21/posredi-voyny-v-rossii-ob-yavlena-masshtabnaya-reforma-armii-zachem-eto-putinu-i-shoygu> (2023年1月11日閲覧)
- ⁴³ «Молодые должны понимать, куда идет Россия,» Meduza, 26 октября 2022. <https://meduza.io/feature/2022/10/25/molodye-dolzny-ponimat-kuda-idet-rossiya> (2023年1月11日閲覧)
- ⁴⁴ «Патрушев назвал события на Украине противостоянием России и НАТО,» Ведомости, 9 января 2023. <https://www.vedomosti.ru/politics/news/2023/01/09/958340-patrushev-nazval-protivostoyaniem> (2023年1月11日閲覧)